

観光振興活性化に与えるバイパスの影響についての考察

— 秋保工芸の里を事例として —

勝 田 亨

Consideration about the influence of the
bypass given to sightseeing promotion activation.
— AKIU HANDICRAFTS VILLAGE is made into an example. —

Toru KATSUTA

【要旨】

本研究では、観光振興活性化の基盤とするために、従来から、観光資源として歴史と自然環境に恵まれた温泉郷を有する地区において、新たに体験できる観光を目指した施設づくりが行われるケースを想定し、「場」としての施設が「点」として存在するだけでは、地域という「面」の活性化との結び付きは必ずしも強くは無いものと仮定した。もとより、集う場と接客・管理等の働く場を設けることは、活性化に寄与するところであるが、「点」を「線」で結び、「面」を形作る要素として道路交通の果たす役割に着目し、宮城県仙台市太白区秋保にある“秋保工芸の里”を事例として取り上げ、仙台市中心地と秋保温泉郷を結ぶバイパスが整備されたことが、点在する体験できる観光施設と訪れる観光客及び、迎える地域社会の観光振興活性化にどのような影響を与えるかについての考察を試みた。

ABSTRACT

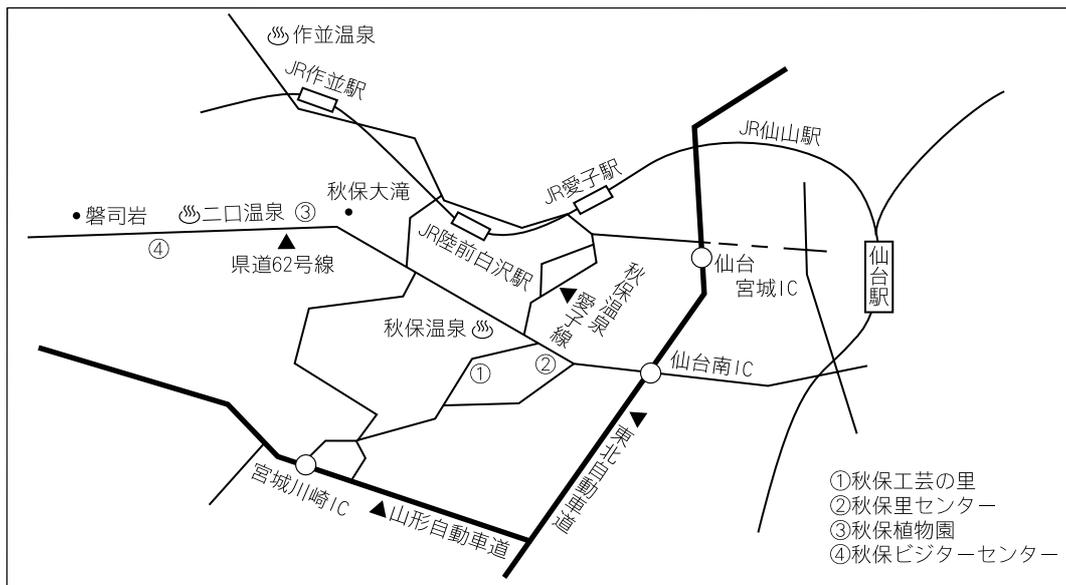
This research reports the following things. In order to aim at sightseeing promotion activation, when the tourist facilities which can be experienced are built. Also in the Hot-springs resort which has wonderful natural environment and wonderful history. Even if dotted with the institution, it was assumed that the influence which it has on activation of an area was weak. Since the role which road traffic plays was observed, The AKIU HANDICRAFTS VILLAGE

which Taihaku-ku, Sendai-shi, Miyagi-ken AKIU area was taken up as an example. That the bypass was fixed considers the influence which it has on tourist facilities, a tourist, or local.

1. 秋保温泉郷

本研究で事例として取りあげる「秋保工芸の里」は、宮城県仙台市太白区秋保町の秋保温泉郷に位置している。仙台市太白区の総面積は230Km²、人口は平成14年10月1日現在で89,669世帯、223,381名（男110,511名・女112,870名）であるが、そのうち面積は秋保地区は140Km²強と約6割を占めており、人口は1,765世帯、4,883名（男2,291名女2,592名）で約2割である。昭和62年に宮城郡秋保町が仙台市と合併し現在の仙台市太白区秋保町となった。山形県に隣接した仙台市の西端に位置し、名取川の上流であるため県立自然公園である磊々峡（らいらいきょう）、二口渓谷（ふたくちけいこく）、国指定名勝の秋保大滝など清流の景観、また、「マタギ」の祖として伝説のある「磐次郎・磐三郎」にちなんだ国指定名勝の磐司岩（ばんじいわ）などの自然資源に恵まれている。その秋保地区にある「秋保温泉郷」は藩政時代には伊達家の湯治場としての由緒を持ち、現在でも兵庫県有馬温泉、愛媛県道後温泉と並び日本三名湯のひとつとして有名である。古くから続いた温泉郷であるため史跡も多く、秋保神社の神楽奉納や伝統の田植え踊りなどの郷土芸能、名取川上流の釜淵かっぱ伝説などが知られている。温泉郷の旅館・ホテルは規模も大きく、老舗として名を馳せているものが多い。中でも中心部にある老舗旅館は「伝承千年」をうたっており、秋保温泉の歴史を伺わせている。平成14年現在、地元の温泉組合に加盟している旅館24施設のうち、7施設が（社）国際観光旅館連盟に加盟している。

図1 仙台市太白区秋保地区及び周辺略図



2. 秋保工芸の里

「秋保工芸の里」は秋保温泉街から東の高台へ約1.4kmの距離にあり、敷地中央の駐車場を取り囲む様に「工房」施設が配置されている。施設内で配布されているパンフレットでは、工芸の里の描写を「秋保の自然と共に呼吸し、同じ鳥の声で目覚め、暮れなずむ陽を見送る。そして9つの工芸「家」たちはこの里で暮らしながら、それぞれの「手しごと」に打ち込み本物を創り続けている。伝統を伝えるだけでなく、暮らしの中に生きてゆく美しさを追求することによって風土と人と作品との新鮮な出会いが生まれる。静かだけれど、内に秘めた情熱がふつふつと感じられる「手しごと」の競演がこの里で繰り返されている。」と表している。

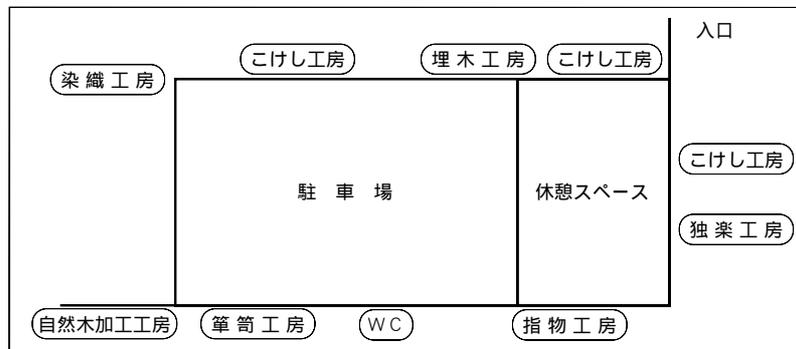
工芸の里の沿革を見ると、昭和50年に仙台在住の工人グループが「手工芸の邑」計画を立てたのに対し、5年後の昭和55年に旧宮城郡秋保町を対象とした建設方針が確認された。昭和57年5月には工人グループ「匠会」を結成。昭和61年3月、旧秋保町が「秋保工芸の里建設実施計画」を策定し、昭和63年4月に「秋保工芸の里」がオープンした。なお、昭和62年10月に建設がはじめられた工房付併用住宅は、中小企業経営安定資金の融資を受けて着手されたものである。分譲地には「秋保工芸の里分譲要綱」で入居条件が定められてたことは、入居しなかった工人の中にはハードルとして受け取られた場合も考えられる。ちなみに分譲地は平成14年度においても2区画が空き地になったままであり、今後の活用が模索されている状況にある。

工人グループが立てた当初のビジョンには、「都市化が進むなかで、都市部には住工混在地区でも作業場をもつことが難しくなり、近所へ気兼ねしながら作業するよりは、もっと自由に仕事に取り組み、伝統工芸を守り、育てたいという願い、あるいは販路の拡大、原材料の確保、後継者の育成などを図りたいという期待」があったが、回りはじめてみると、宮城県および秋保町の「工芸品産業の振興・地域文化の醸成及び地域経済とりわけ観光関連産業の振興」という事業目的に沿った活動が推進されることとなる。とりわけ「観光」に関しては「これからの観光は、見るだけの観光では観光地としての魅力に乏しく、創作する観光、体験できる観光への脱皮が迫られてきている。このような意味で、この施設のもつ特性を観光面で十分に活かしていく考えである。見たり、きいたり、味わったり、作ったりしたいという諸活動がここしかない固有性をもった大きな満足感を与える観光地を整備し、観光客の入込数の増大が期待できるだけでなく、見る観光から創作する観光への質の転換が可能であり、観光基盤の充実と安定した観光地として発展が期待できる」とされ、工人達の思惑とは若干視点の異なった、観光拠点としての役割が期待されている。

実際に「秋保工芸の里」にどれだけの訪問客があるのかを示す数値は、仙台市経済局地域商業支援課が平成8年度に実施した調査結果が資料としては存在するが、それによると、平日379名、休日906名の利用状況で、単純に年間利用者数を推定すると10数万人の訪問客が「秋保工芸の里」を訪問していることと見做される。ちなみに平成8年度の「秋保温泉郷観光客入込調査」では年間

利用者総数を1,402,300名としているので、観光客の7%強が「秋保工芸の里」を訪れたことになる。「秋保工芸の里」は最寄の車道に門を構え、入口に看板は設置しているものの高台の奥まった場所にあるため、遠くからは施設自体を目にすることが出来ない立地であり、通りすがりに観光客に興味を湧かせる景観づくりの様な工夫はされていない。これは住居を兼ねた工房が「手しごと」の創作現場となっており、「直販所」や「おみやげや」の様な展開を目論んでいないことや、自然環境の保全を重視していることが大きく影響した結果であろう。また、工房で展示・販売されている作品は小物もあるものの、「欲しい」と感じさせる様な作品はさすがに高価で行きずりに購入できる雰囲気では無いものが多い。夏休み等のイベントでは、駐車場に隣接する休憩スペースにテント掛けして、竹馬作りなどの体験工作教室が催されたり、各工房に事前予約すれば実習体験もできるが、もとより対応できる人数や所要時間の制限により気軽に参加するのは難しい。「こけし工房」などは工人が「手しごと」をしている様子を見学することに向いているが、他の木工関係の工房では、なかなか実演を目にすることも無く、目にする機会があっても素人には作業内容もよく理解できないであろう。もとより「里」という「場」が賄いきれる役割は限られているし、「里」が孤立した活動を行うのでは、集客の面での成果を上げることについて問題があると考えられよう。その点で孤立した活動を連携を持った広がりのある「面」としての活動へと発展させるためには、「点」である他の観光施設の存在と、それらを結ぶ「線」として交通の果たす役割が重要となる。

図2 秋保工芸の里略図



3. 秋保町の観光施設

自然資源に恵まれた秋保地区は観光地として利用されてきたものの、駐車場・トイレ等の整備の外に施設を新たに建設するなどの動きはあまり積極的には行われてはこなかった。その様な中で、本研究が扱う「場」、「点」としての主な施設として以下4施設を挙げる。(利用者数は概算)

① 仙台市秋保大滝植物園

秋保大滝、大滝不動尊の敷地に隣接しており、昭和55年にオープンした。総面積5haの敷地には、蔵王山系の植物を中心に約52科200種、15,000本の草木が植えられている。園内には

観光振興活性化に与えるバイパスの影響についての考察

遊戯広場もあるが冬季は閉園されており4月～11月まで利用されている。

② 仙台市秋保ビジターセンター

建設が合併条件にも含まれた施設で、平成3年9月よりオープンした。県道62号線（仙台山寺線）沿いの山形県境に位置する、二口峡谷、磐司岩の景観に恵まれ二口温泉地区の中に設けられている。施設の機能としては、各地にあるビジターセンターと同じく、観光客への情報提供、トイレ・休憩の場として利用されている他、二口キャンプ場の管理、利用申込の受付や登山者カード記入所としても機能している。冬季は閉館し、毎年4月から11月までの稼働で、キャンプ場には13棟のバンガローがあり、釣りやハイキングの拠点として、学校や子ども会、家族連れに利用されている。オープン時の平成4年度の利用者数は19,221名であったものが、平成13年度には36,907名と利用者数は安定している。

③ 秋保・里センター

平成13年3月よりオープン。磊々峡の遊歩道沿いにあり、地域紹介や地元工人の作品等が展示されている「ふれあいスクエア」、日曜・祝日等に随時参加できる各種工芸の体験教室や休憩・図書コーナー、ホールの貸し出しを行う「多目的ルーム」、磊々峡をながめながら食事のできるレストラン「秋保茶屋」が備わっている。また、ロータリー広場では毎週日曜日にJA秋保支店と共催で朝市「秋保・里の市」が開催され、地場野菜等の販売が行われている。平成13年度の利用者数は60,469名であった。

④ 共同浴場

温泉郷にある共同浴場は1施設のみである。共同浴場自体の歴史は長いが、現在の施設は昭和55年にオープンしたもので地元住民の集まりである「契約会」が管理・運営している（契約とは口頭では「ケヤク」とも呼ばれる独特の集まりで「青年団」等のより郷土に密着した親密な集団の様なもので、東北各地にこの風習がある）。朝8時から夜9時30分までの営業で料金は300円であり、宿泊以外の観光客はもとより宿泊客にも利用されている。利用者の概数は1日あたりにすると約200名となっている。

表1 平成13年度の主なイベントと実施施設

月 日	イベント名	施 設 名
5/4・5	磐神郎・磐三郎祭り	秋保工芸の里
6/3	二口峡谷春の自然観察会	秋保ビジターセンター
1/1～14	昔遊びと百想のこけし展	秋保工芸の里
2/10	雪んこまつり	秋保ビジターセンター

(財) 仙台コンベンションセンター協会資料をもとに作成

4. 秋保町の交通環境

秋保町を取り巻く「点」を結ぶ「線」としての交通環境を見てみると、温泉郷から二口峡谷を結ぶ県道62号線（仙台山寺線）が地区の中央を貫いている。高速道の東北道、山形道のインターチェ

ンジも近く、東北道では仙台南ICが昭和48年11月、仙台宮城ICが昭和50年11月の開業。山形道では宮城川崎ICが昭和63年10月に開業されている。ここで、平成12年4月に供用が開始された一般県道秋保温泉愛子線に注目し、生活道であるバイパスの整備効果をみる。仙台市建設局の『(一)秋保温泉愛子線供用開始に伴う交通量調査業務委託』での道路交通センサス一般交通量調査によれば(調査日:改良前・平日 - 平成11年10月19日、休日 - 平成11年10月17日/改良後・平日 - 平成12年10月24日、休日 - 平成12年10月22日)、断面交通量は、改良前が平日617台、休日870台であったのが、改良後には平日4,188台、休日5,700台と激増している。この結果を同報告書では「平日は、秋保地区からの車輛が混雑する国道286号や仙台村田線などを避けて、秋保愛子線にシフトしたことも考えられる」とし、また「秋保愛子線の休日については観光関連の交通が集中して交通量が増加しており、錦ヶ丘方面から国道457号方面(JR愛子駅前)に直進する車輛も438台から1,547台へと大幅に増えた。湯向交差点では二口方面から左折する交通量が85台から502台へと増加しているが、秋保温泉方面からの右折車輛も105台から582台と増加しており、秋保地区の住民や観光客が、秋保温泉愛子線を利用するようになってきているとみられる」としたうえで「秋保温泉愛子線の新道開通で交通容量が増大し、片側1車線が確保されたり、走行時間が短縮されるなど利便性が向上したため、交通量が増加している。車種構成別にみると、乗用車のみならず大型車や貨物車の通過台数も増えており、秋保温泉愛子線は平休とも、秋保地区と愛子地区を結ぶ生活幹線ルートとして確立された。また、整備前にはほとんど通行のなかったバスが、整備後の調査で平休とも12時間で100台以上通過しており、観光バスや秋保地区の旅館の送迎バスが秋保温泉愛子線を通過するようになったとみられ、平日交通量よりも休日交通量の方が多いことから秋保温泉愛子線が休日の観光ルートとしても確立されたといえる」とまとめている。

公共交通(路線バス)について見てみると、仙台市街地と秋保温泉郷を結ぶルートと、JR愛子駅を利用するルートが秋保温泉愛子線を利用するわけであるが、前者を把握するには経由地が多様であるため、ここではJR愛子駅から秋保温泉郷のルートを取りあげてみる。このルートの路線バスは仙台市営バスが運行しているルートであり平成14年10月7日改正の運行予定時刻表によると、JR愛子駅から秋保・里センター経由は平日(月～金曜日)、休日ともに1日7本の運行である。秋保・里センター経由、JR愛子駅行きは平日7本、休日4本の運行になっている。休日の本数が少なくなっているのは、休日は温泉宿泊客が多いためと、JR愛子駅を利用して秋保地区に通勤している者が減るためと考えられる。なお、秋保地区で運行している路線バスには、私営の1社があり、こちらは秋保温泉愛子線のバイパスが供用される前から仙台市街地と秋保地区を結ぶ地域住民の足として利用されており、秋保温泉愛子線を経由しないルートで運行しているので、単に仙台市街地に向かうだけであれば、路線バスの足は確保されている現状と言えよう。

観光振興活性化に与えるバイパスの影響についての考察

表2 仙台市営バス平日・休日別運行予定時刻本数

① JR愛子駅 秋保・里センター経由

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
平日			1	1				1				1	1	1	1
休日			1	1	1				1		1			1	1

② 秋保・里センター経由 JR愛子駅

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
平日	1			2		1		1		1			1		
休日				1	1		1			1					

平成14年10月7日改正版 仙台市営バス運行予定表をもとに作成

5. 秋保地区の観光客入込状況

新興の観光地に比べると秋保温泉郷は温泉地としての知名度は高いので、利用者は安定していると思われるが、近年の不況やバイパスの供用がどのように影響しているかを見てみたい。『秋保温泉郷観光客入込調査』によると、入込総数はあまり変動が見られないが、利用者居住地の県内、県外内訳を見ると、平成10年から平成13年までの結果では県内者は減少しているのに、県外者はバイパス供用開始後の平成12年、13年と激増している。近年の不況で全国的には観光客のニーズも「安い・近い・短時間滞在」と所謂「安・近・短」の傾向にあると言われているが、この県外利用者の入込数激増はバイパスを利用した観光バスの乗り入れ増も大きく影響していると考えるのが妥当であろう。しかし、名勝地である「秋保大滝」や「二口峡谷」への入込は、若干増加しているものの、影響は少ないことが読み取れる。温泉郷と他施設との「点」を結ぶ「線」が充分機能していないと言えるのではないだろうか。

表3 秋保温泉郷観光客入込調査（1月～12月）

区分	利用者数	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年
秋保温泉郷	総数	1,383,400	1,353,368	1,392,144	1,676,701
	県内居住者	935,700	860,516	645,871	575,485
	県外居住者	447,700	492,852	746,273	1,101,216
秋保大滝	総数	328,800	351,800	375,600	442,900
	県内居住者	253,000	270,800	289,100	331,400
	県外居住者	75,800	81,000	86,500	111,500
二口峡谷	総数	407,900	425,780	444,984	525,066
	県内居住者	338,000	314,562	333,640	394,091
	県外居住者	69,900	111,218	111,344	130,975

(財) 仙台コンベンションセンター資料より作成
数値は概算

6. 観光と余暇、ホスピタリティ

本研究では観光を「余暇」と「ホスピタリティ」の2つのキーワードで捉えることとする。まず、「余暇」について見ると、総理府広報室の「国民生活に関する世論調査」（1995.5月調査）によると、「これからの生活のどのような面に入れたいか」という質問に対して「レジャー・余暇時間」の回答が35.3%で「住生活」25.1%、「食生活」15.4%を大きく上回っていた。7年前の調査なので近年の不況下にあっては若干の変化は予想されるものの、「バブル」と呼ばれた好景気時の総合保養地域整備法制定（1987）によるリゾート開発が、下火となった時点においても、「レジャー・余暇時間」が重視されていくことを示す比率として参考となるであろう。「余暇」への関心について（『余暇生活の研究』）は「余暇に対する関心を呼び起こした今ひとつの契機は、余暇時間利用の客観的条件をなす労働時間の長さに関わる」とし、余暇問題の発生について「仮に労働時間が短縮し、休日休暇が増大したとしても、労働者が地域的に分散しているとすれば、余暇需要は集中しては現れない。現われたとしても、寄宿舍や会社町のそれのように特殊な形をとることになる。だが、労働者が地域的に大都市に集中することになれば、仮に労働時間の短縮、休日休暇の増加がなくても、余暇需要は増大する。それは単に量的な増大だけではなく、都市生活という環境の中での増大であるから、質的变化を伴う」と述べ、さらに「余暇需要は、単に労働者または就業者だけに存在するだけではない。非就業者、すなわち就業前の児童、生徒、家庭婦人、隠退後の高齢者などにも存在する」としている。観光という行動も、目的は「レジャー・余暇」であり、秋保地区という仙台市街地に近く、温泉、史跡、自然資源に恵まれた地域を訪れる観光客に当てはまるであろう。

次に「ホスピタリティ」については（『ホスピタリティ・マネジメント』pp.37 - 43）、その概念を「サービス」に対応して見てみると

- ① お互いに影響し合う相互性
- ② 実際の目的に役立ち効力のあるようにする有効性
- ③ 精神上のことを重んずる精神性
- ④ 期待されることが実現される条件が、それわを妨げる条件よりも優性であると確認されているような可能性
- ⑤ ホスピタリティの場で絶えず予知できない意外な新しいものを生み、飛躍していく創造性
- ⑥ 私的な形態でなく社会的・共同的な形態を重んじる社会
- ⑦ 文化の向上・発達・文化価値の実現を図る文化性
- ⑧ 人間の心を楽しませ楽しむ娯楽性
- ⑨ ホスピタリティの場で一定の材料・条件・技巧・様式などの美的創作・表現をする芸術性
- ⑩ 動物的・機械的などに対しての人の行為・感情の人間らしい思いやりのある人間性などを重視し、絶えず客人と主人の満足感すなわち快適さと精神的充足を生むために、双方が創意工夫を凝

らした能動的な姿勢による相互関係の樹立となる。

「観光客」と「接客者」だけの関係では無く、「地元生活者」や「公共施設スタッフ」そして秋保地区では「工人」といった様々な人と人との関わりが、観光という行為によって生じるのであるから、このように「ホスピタリティ」の概念からとらえることも重要になると考える。

7. 秋保工芸の里の課題

工芸の里の出発点は工人の「手しごと」に対する思い入れが大きかったと言えるが、現状では「里」として機能するために「観光」の部分が期待され、活動のメインになっていると思われる。「秋保工芸の里分譲要綱」では伝統工芸品製造業として18種が指定され、宮城県の伝統工芸をほぼ網羅できるようにはなっているものの、実際に「工芸の里」に入居・活動している工人は木工関係中心となっている。これでは観光客のニーズに対応することは困難であり、「里」として孤軍奮闘しても期待される役割とは噛み合わない結果となってしまう。例えば、指定された業種には「陶磁器製造物製造業」もあり、陶芸の実演体験などは、観光客の集客に適しているし、排煙の工夫をすれば市街地では作ることが難しい窯をつくることもできるので、工芸の里のシンボリックな存在になるのではないだろうか。「温泉郷」を訪れる観光客は必ずしも「工芸好きの趣味人」ではないのであるから、いくら質の高い本物の「手しごと」の現場や作品を見せられてもどれだけ興味や理解を示すか、そもそもが未知数である。他地区の「こけしの里」や「デコ（張子）屋敷」などの工房付併用住宅の成功は、テーマを絞り「観光」を当初の主たる目的としたことが大きいのである。工芸の里の工人のパンフレットには工人一人一人の紹介がされているが、もっと工人の知名度を上げる工夫をすべきである。

秋保工芸の里の課題としては、開設時に長谷川が（『地域産業政策』pp.203 - 204）以下の5点を挙げている。

- ① 土産物の販売で多様な観光客に対応できるような品揃えが無い
- ② 生産工程の実演が来客者を魅了するように工夫されていない
- ③ 工人との対話という看板が形骸化している
- ④ 趣味的につくる、楽しみが味わえる、こうした工夫がない
- ⑤ 良い工芸品が良い料理を育てるという感覚がない

この5点は現在でも課題として重要な点となるが、本研究では秋保温泉愛子線の改良（バイパス）や秋保・里センターのオープンといった最近の活動が、これらの課題をクリアする上で大きな役割を果たすものといった視点から以下に考察する。

8. 考 察

I. 「点」の存在

これまでの「点」としての施設の経緯を見ると、秋保地区は中心を県道仙台山寺線が貫き、二口峡谷を経て山寺まで向かう観光客に以前から利用されてきた。しかし、自然環境の保全の意味も込められているのであろうが、拠点となる施設に乏しく、観光の「点」が存在してこなかった。温泉郷は宿泊せずに通過する観光客にとっての利用は難しく、そのような観光客にとっての秋保地区は、景色を眺めるだけの意味しかなかったと言える。そのような中であって国指定名勝の「秋保大滝」は下車して滝見をする「場」として存在しており、観光客の滞在目的となる「点」として機能していた。やがて旧秋保町と仙台市が合併することとなり、「磐司岩」と二口温泉のある地区に「秋保ビジターセンター」を建設することが合併条件のひとつとなり実現した。「秋保工芸の里」は「秋保温泉郷」から徒歩で移動可能な地区にあり、宿泊客の立ち寄りの場としても機能することが期待される施設であった。「秋保大滝」と「秋保ビジターセンター」、「秋保温泉郷」と「秋保工芸の里」の、4つの「点」が結びついて「面」として機能するほど強い関係にはならないままの状況が続いた。しかし、平成12年4月の秋保温泉愛子線の供用開始に伴って、仙台市市街地とのアクセスが改良されたことと県外からの温泉郷への入込数が増加し、4つの「点」が「面」として機能する条件が整って来たと考えられる。平成13年3月にオープンした「秋保・里センター」は5番目の「点」であり、活動拠点としての役割を担うことを検証したい。活動拠点としての適正を挙げると

- ① 地元住民や市民活動に利用できる「多目的ルーム」を提供しており、ミニコンサートなども開催している。
- ② 館内にレストランがあり、メニューには「秋保の味」をうたった品も加えている
- ③ 秋保地区全域の観光案内を行い、情報検索システム等の機器や工芸の里の工人の作品の展示品が備わっている。
- ④ 敷地内の空スペースで「手作りコーナー」や地場産の「里の市」を開催したり、伝統芸能である「田植え祭り」や地域のイベントである「秋保かかしまつり」を開催している。
- ⑤ 秋保温泉愛子線、県道仙台山寺線から近く交通の便が良い
- ⑥ 温泉郷の中心地と工芸の里に近く、レンタサイクルなどを行っている
- ⑦ 毎月「あきう里センターかわらばん」を発行、配布し、秋保地区のイベント情報や名所旧跡案内、工芸の里の工人へのインタビューなど独自の情報を発信している。

と現在も幅広く、観光活動拠点として「核」となり得る活動を行っている。

この活動を前述の「ホスピタリティ」の視点で、検証すると「観光客」へのサービスとしての「観光」だけではなく、地域住民の文化的活動にも貢献していることが分かるであろう。ミニコン

サートや「田植え祭り」、「かかしまつり」などはコミュニティの活動であって、そこに「観光客」が参加することも可能であるが、「観光客」が参加しなくとも地元住民が楽しむことで成立するイベントである。立地条件として、単なる公民館や文化センターとは違って観光客が利用することが前提とされた施設なのだから、自分が楽しむことで、他者を楽しませることを深めることができれば、ビジネスとしての仕掛けがなくとも「観光」の目的に叶うであろう。手作りの「かわらばん」も観光パンフレットとは違った速報的な情報であり、観光客はもとより地域住民にとっても興味のある広報物になっている。情報の面では、秋保地区全域の観光案内の窓口としての機能も、これまでに欠けていた活動である。この「秋保・里センター」は（財）仙台観光コンベンション協会が運営しており（この協会は宮城県、仙台市、仙台商工会議所および地元経済界、観光・物産などの関係諸機関・団体を中心に平成12年4月に設立された財団法人で、主な目的、活動として仙台市および周辺地域の発展と文化の向上を図るためコンベンションや観光誘致、並びに「混載会議観光都市・仙台」のPR活動を行っている）、これまでは、個々の施設ごとの窓口はあったものの、他施設の情報を得ることができず、情報も「点」として存在し結びつきが弱かった。例えば、手元にある「秋保・工芸の里」の案内パンフレットに掲載されている「お問い合わせ」には「秋保工芸の里事業組合」、「仙台市経済局地域商業支援課」、「仙台市秋保総合支所総務課」の3箇所の連絡先が掲載されており、結果としてはどこに連絡しても情報は得られるのではあるが、連絡する側にしてみれば戸惑いや「たらい回し」の危惧等、 unnecessaryな心配をしまい、連絡することが面倒になってやめてしまうことも考えられる。実務上やむを得ない事情があるのであろうが、渉外的なことだけではなく、窓口を一本化することは、イベントの企画・運営、利用状況の調査・分析・公表等の活動を図る上でも大切になるであろう。観光の集客効果として「食」の存在も重要であり、これまでの施設では実行できずにきた部分である。「温泉郷」に宿泊する観光客にとっては旅館で供される「食」が楽しみのひとつであるが、通過する観光客も「手軽で・美味しく・地元ならではの物」を食したいというニーズがあるであろう。秋保・里センターの案内パンフレットでは館内の「あきう茶屋」の紹介で「店長こだわりの秋保の味」として「磊々そば」が写真入りで紹介されている。実際の評価までは調査できなかったが、今後の展開に注目したい活動である。さいごに、イベントに対する「場」の提供を考察する。昨今のコミュニティ祭りのイベントは、ともすれば単なる「フリーマーケット」形式になりやすく、地域振興をはかる上では必ずしも充分では無い場合も考えられる。秋保・里センターでは、合唱や演奏のミニコンサート、工人や地元の職人を講師とした子供対象の工作教室や女性対象の七宝焼き教室、日曜朝市などバラエティに富んだイベントが開催され、厚い年齢層が参加できるのはもちろん、温泉宿泊客でも気軽に参加できるように工夫されている。行政の「区」を単位とすると、利用対象者の母集団が大きすぎて施設利用の申請をしても、なかなか順番が回ってこなかったり、利用条件や時間等のしほりも強くなり勝ちだが、「秋保地区」という単位ならこのような小回りの効く活動も可能であることは、大きな利点となるであろう。

II. 「線」の存在

従来から県道や高速道路のインターチェンジがあったにも関わらず、なかなか「点」と「点」が「線」で結ばれなかった。観光客の交通の面を考えれば県道仙台山寺線や高速道のインターチェンジが近いことなど、決して不便な状態ではなかったと言える。しかし、地元住民にしてみれば、外出、特に仙台市街地へのアクセスの利便性は必ずしも良好でなかったであろう。今回改良された秋保温泉愛子線は山の中を突っ切る形で切りとおされたのだが、これまで秋保地区から仙台市街地へ出るには、その山を挟む様に別れた2つのルートがあり、道路の混雑状況等を考えながらどちらかを選んでいただが、いずれのルートでも仙台市街地までは普通の混雑状況で40分以上は所要時間が必要であった（改良前に実際に利用して検証）。1つのルートでは最寄のJR仙山線の白沢駅まで20分程度で到着できるのだが、白沢駅は快速列車が停車しない上に仙台より手前のJR愛子駅が始発・終点という列車も多いなど便が良い状況では無い。改良前の秋保温泉愛子線は急勾配・急カーブが続き、乗用車のすれ違いができない箇所も点在しており、ルートとしてはリスクの高い選択であった。そのため、バイパスの供用が開始されたことにより、山を回避せずに国道48号線（仙山西道路）に乗り入れて仙台市街地に向かったり、JR愛子駅を利用することが可能になったことは、地元住民の生活にとってプラスが大きかったと言えるであろう。この評価には、実際に通勤・通学や買い物で出かけるといった行動をとらない住民にとっても「精神的な距離」が縮小した効果も含まれる。「観光客」が利用する道と「自分たち（地域居住者）」が利用する道の一体化と利便性の向上は、道の利用者にとって重要なことではないであろうか。「二口峡谷」や「工芸の里」は観光客を集客するには有効であっても、地元住民にとっては商品の配達や事務的用事以外には、訪れることも無い施設と受け止められることもあるであろう。生活に関わりの薄い道路の改良であれば、少しくらい観光客の数が増加してもどこか他人事になってしまうことも考えられる。観光資源を有し、観光関連の仕事につく機会のある地区の住民にとって、「自分たち」を含めた交通の活性化は、閉塞感を払拭し、ルートの選択枝が増えたことによって新たな活動を図る契機ともなり得るであろう（例えばアクセス案内にJR愛子駅からのルートを新たに掲載する等）。

III. 「面」としての展開

「面」としての展開を考察するために、まず「ホスピタリティ」の視点からその基本的要素因子を見てみる（『ホスピタリティ・マネジメント』pp.90 - 91）。

- ①動的利便因子 ②静的利便因子 ③維持管理因子 ④安全管理因子 ⑤環境保全因子
- ⑥技能因子 ⑦情報提供因子 ⑧手続因子

以上8因子の中から、本考察では⑤の環境保全因子から⑦の情報提供因子を取り上げることとする。まず、「環境保全因子」は「自然資源保護および文化資産、文化遺産の保護、並びに公害防止等の環境保全の因子」とされており、秋保地区においては国指定名勝をはじめ自然資源に関しては大変に優れており、観光資源であるとともに開発には様々な注意を払わなくてはならない。もとよりなんら指定のしびりをうけていなくとも、自然環境は保全しなくてはならないのであるから、施設の建設やモータリゼーションに関することは必要最小限にとどめる必要がある。そのためには「点」

として存在する各々の施設の役割もきちんと定めなくてはならないであろう。例えば工芸の里の敷地内にレストランやみやげ物の販売の機能をもった施設を新たに建設するのではなく、里センターにその機能を集約するような方向性が大切である。次に「技能因子」は「ホスピタリティを提供する前提として熟練した特殊技能や専門的な技術・技芸を示す因子」で、工芸の里の工人はもとより、ビジターセンターの職員は、登山やキャンプについての専門知識、里センターの職員は各施設や地元の情報に精通し案内ガイドをこなせる程度の専門性を高めることが必要になる。

さいごの「情報提供因子」は「相手方、客、来訪者が活動するために必要な情報提供、利用解説・指導等を行う因子」であり、工芸の里を例にすれば「実習体験」の予約の仕方や参加状況、実習内容など、参加しようと思いついた利用者が行動に移すのに必要な情報を提供する事などである。このようにそれぞれの施設が特化することで係わり合いを持ち、それが「面」として機能することこそ望ましいと考える。具体的には「里センターのあきう茶屋で作ったパンや菓子類を各施設で販売する」・「二口峡谷の風景を彩色したこけしをみやげものとして工芸の里で作成、販売する」・「ビジターセンターのハイキングコースで植物園の職員が草花の解説をする」・「里センターで工芸の里の実習体験の申込み受付や工人とのスケジュール調整を行う」等が浮かんでくる。もちろん実現可能か否かは実務的な問題にならざるを得ないが、同じような施設が「点」として乱立するよりは立地条件や機能を活かした「点」が差別化した上で連携し「面」となる工夫が大切なのである。個々の施設が足りない部分を自分で補ったり、なんでも自分で対処しようとして本末転倒になるリスクを避けることが重要である。また、これまでの秋保地区の観光施設の活動には、利用者の意見はもとより地元住民の意識調査などの活動が薄かったきらいはないであろうか。データに左右される必要はないが、客観的な評価に基づいた自己点検や企画はなおざりにはできない。そのような意味でもお互いの施設に関わりをもって行き来することで、長所・短所を議論することが可能になり、あるいは地域全体の問題として改善するヒントが見つかることに繋がるであろう。

「面」の展開を考える上で、地域住民の生活に関わる事例として国道48号線（仙台西道路）及びJR愛子駅方面から秋保温泉愛子線へ至る経由地である錦ヶ丘ニュータウンの事例をとりあげる。錦ヶ丘は民間業者がマンション、宅地、建売住宅を分譲している新興住宅地である。これまで住民が活用するためにショッピングセンターを開業していたものを、平成14年8月に「東北初のアウトレット型モール」としてオープンした。オープンしたばかりだが、休日には利用者が多くいることもあり、送迎の「無料シャトルバス」を運行している。このシャトルバスは、もともと愛子地区で送迎を行っていた業者が車輛の管理にあっているが、仙台駅前・JR愛子駅・アウトレット型モールを循環し利用状況も良好の様子である。秋保温泉郷からアウトレット型モールへのアクセスは車で5分程度であり、混雑する休日避ければ仙台市街地まで行かなくとも、ある程度のショッピングが楽しめる効果もあるが、本研究では「シャトルバス」の事例に注目し、秋保地区での応用を考察する。JRを利用して山形方面へ向かう場合はJR愛子駅まで10分程度であり、仙台市街地までなら「シャトルバス」同様、国道48号線（仙台西道路）を利用するルートで20分程度になる

(もとより道路の混雑状況等によって若干の違いはある)。また、仙台西道路経由で仙台市街地を抜けるルートは「青葉城址」や「青葉通り」など観光スポットへ寄り道するにも便が良いルートとなっている。各旅館・ホテルが行っている送迎の枠を超えて住民も利用可能にすれば、秋保・里センターを基点として温泉郷と秋保大滝、二口峡谷や秋保工芸の里を循環するコミュニティバスなども実施可能ではないであろうか。実際、仙台市街地には青葉城址等の観光地や博物館等を循環する「るーぶる」(観光シティーバス)が運行しており、現在、11箇所の停留所を約1時間でまわっている。利用料金は一律で1回乗車250円(子人130円)、1日乗車券600円(子人300円)で利用できる。観光客に好評となっている。秋保温泉郷は歴史がある反面、道路が狭く曲がりくねっている箇所が多く大型観光バスや送迎車輛、マイカーの混雑がネックとなっている面がある一方で、小高い丘の上にある工芸の里や温泉郷から離れている二口峡谷へは徒歩で移動するにはむかない現状にある。自然保全からみれば大型駐車場を新たに設けて「パークアンドバスライド」のようなシステムを構築するのは困難であるが、今現在更地になっているような遊休地を活用した小規模なコミュニティバス・システムなら可能なのではないであろうか。福井県福井市が平成13年10月に実施した「中心市街地の活性化に向けたトランジットモール等社会実験」によると影響検証項目として

「歩行者優先の道路空間の整備によって、道路混雑の悪化、路上駐車増加など周辺への影響」

「自動車の乗り入れ規制が商店街に与える影響」

「自動車の乗り入れ規制による沿道商店街の荷捌きや商品の搬入などの影響」

を挙げ、さらに公共機関アクセス体系の整備項目として

「駐車場を確保し、パークアンドライドを実施」

「小型車両によるシャトル運行を行うことで、起点から中心市街地へ、あるいは中心市街地からその周辺への新たな短距離交通手段としての可能性を検証」

「公共交通機関利用者数の変化と自動車から公共交通機関への状況を検証」

等が挙げられた。このような課題は秋保地区にも通ずる課題であり、秋保地区では冬季の観光客集客や生活交通手段の確保も悩ましい課題になるのであるから、「面」の展開の応用としてコミュニティバスと小規模パークアンドライドの社会実験を提言したい。

9. まとめ

オープンして15年目を迎えようとしている秋保・工芸の里を中心として、バイパスの供用が地域振興活性に果たす役割について考察してきたが、以下にまとめると

① バイパスが大型バスの通行を可能にしたことが県外居住観光客の入込が増加の要因となり得る。

バイパス供用が開始されてからまだ2年弱であり、今後の展開を見なくてはならないし、県外居住観光客がバイパスを利用しているかの実態調査も必要である。しかし、ここ2年の入込数の

観光振興活性化に与えるバイパスの影響についての考察

激増にはなんらかの原因があり、バイパス供用がその要因のひとつであることは確かであろう。また、温泉郷への入込増が自然資源の観光地の入込には影響していない様子があることから、地域全体の新興活性化には「点」と「点」を結ぶことが重要であると考えられる。

- ② 「点」と「点」を結ぶことによって、それぞれの機能を特化することができる。

秋保・工芸の里の工人としての技術の高さや質の良い手しごと、その結果としての作品については、従来の観光ビジネスとは相容れない部分が顕在していたが、「里センター」が観光の「核」となることにより、工人は本来の手しごとに専念しやすくなることが期待される。観光客のニーズには「滝が見たい」、「草花の間を歩きたい」、「工人の手ほどきで実演体験がしたい」、「キャンプがしたい」等、様々であるのだから、それぞれの施設がいろいろなニーズに答えるのではなく、観光客のほうに「点」を結ぶ「線」を使って移動してもらえような、情報提供や交通環境整備が重要である。ひとつの「場」で過ごすより、この移動する行為が新鮮な発見へとつながるのである。

- ③ バイパスが地域住民の生活道路として、その活動を促す要因となり得る

市街地へのアクセスの便が改善されたことから、都市部との物理的、心理的距離が縮小され、住民の活動も活性化することが期待できる。一方的に観光客を迎える山村ではなく、自分も外部へ積極的に出かける交通の双方向性を図る。

- ④ バイパスによるアクセスの利便性が公共交通の活用に広がりをもたせる要因となり得る。

これまでは最寄駅の便が良好とは言えなかったので、鉄道と連動した送迎は難しかったが、バイパスにより鉄道との連動や公共交通による都市部への移動という選択肢が増えた。また、公共交通の利便性を認識することで、地区内にも導入する検証も行いやすくなる効果がある。観光客に快適な交通環境は地域住民の生活面にも快適さを生むことが期待できるであろう。

仙台市太白区秋保地区は、名勝地・温泉郷と自然資源だけでも観光地としてなりたってきた地区である。また、仙台市街地という都市部からも近いという立地条件にも恵まれている。しかし、その秋保地区でも工芸の里、ビジターセンター、里センター等の建設や活用を図る集客努力をしなくてはならない現状にあるといえよう。これらの努力は地域住民の生活活動の広がりにも関連することは本研究で考察したとおりである。事例とした生活道のバイパス供用が契機となり、観光客・地域住民の交通アクセスの便が向上することで地域振興のために「点」を「線」で結び「面」として活用することの可能性が秋保地区の特殊事例ではなく、他地区でも期待できることではないだろうか。

(かつた とおる・高崎経済大学大学院地域政策研究科博士後期課程)

勝 田 亨

参考文献

- 長谷川 秀雄、「地域産業政策」2000.12、(株)日本経済評論社
- 服部 勝人「ホスピタリティ・マネジメント ポスト・サービス社会の経営」2001.6、丸善株式会社
- 大阪市社会部調査課「余暇生活の研究」1923.4、弘文書房『生活古典叢書 第8巻 余暇生活の研究』1970.11、(株)光生館
- 野沢 浩「労働と余暇 - 法社会的・労働科学的考察 - 」1975.10、日本労働協会
- 社会法人国際観光旅館連盟「 - 平成13年版 - 国際観光旅館営業状況等統計調査施設と経営 (平成12年度財務諸表より)」2001.12
- 重松 成二「伝統工芸と手仕事」1985.7、(財)労働科学研究所出版
- 橋爪 紳也「日本の遊園地」2000.9、株式会社 講談社
- 全国社会保険労務士会連合会「労務管理マニュアル - 観光地旅館業編 - 」1985.5、労働基準調査会